

『一粒の米の話から』

江戸時代、旗本・政治家・儒学者として活躍した新井白石は、幕府を実質的に主導し「正徳の治」と呼ばれる一時代をもたらす一翼を担いました。六代将軍徳川家宣に仕え、七代将軍徳川家継を守り立て、八代将軍に徳川吉宗が就くと失脚しました。

このように幕府の政治を動かす大きな仕事をした白石でしたが、少年の頃、朝から晩まで遊びに夢中で、勉強に励む様子のないのを見かねて、白石の父親が米びつを持ってこさせ、「一粒の米」の話をして諭したそうです。

「米びつから、一粒の米をとっても、お米が減ったかどうか分からない。けれども、一年間か二年間、毎日一粒ずつ取っていると、減ったことがわかる。反対に、米びつに一粒の米を加えても、お米が増えたかどうかは分からない。しかし、一年間か二年間、毎日一粒ずつ加えていると、増えたことがわかる。学問も同じである。一日勉強したから利口になるわけではない。一日怠けたから愚かになるのではない。しかし、一年、二年続ければ、必ず変わってくる。」

それからの白石は、一粒の米粒を机の上にお守りとして置き、怠けようという気持ちがむくむくと起きたとき、その米粒を見て自分を励ましながら努力を続けたそうです。

この話は、正に「継続は力なり」という教えをわかりやすく説明するにはうってつけの内容といえます。幼い子どもにも毎日食べる米のことですから、その大きさが実感としてとらえられ、そんな小さな米粒でも、一つ、二つ・・・十、二十と数が増えると、多くなったことが目に見えます。しかし、二十粒ほどの米を見ても、けっして多いとは思いません。

ちなみに、米一升の米粒は何粒か？ 昔の人は、「ムシヤフナ」と覚えたそうです。つまり、六四八二七粒。これは必ずその数になるとはいえません。およそ六万粒だとすることが多いようですが、一升枧に入った米粒を数えることは大変なことです。

一合だとおよそ六千粒、これでも数えるのが簡単とはいえません。米一合の重さは、およそ百五十グラムから百六十グラムくらいだそうです。子どもに米一合の量を示すには、目で見えた量、手に持って重さを感じる量としては、手頃な量ではないかと思います。

この米一合分の努力を考えさせるとき、毎日一粒の米を一合枧に入れたとして、およそ十六年以上の時間がかかります。

この逸話を子どもにわからせるために、実際に米や杵を使って説明するかどうかはともかくとして、子どもたちが「努力をすることとは、そういうことなんだ」とほんの少しでも心の中に留めておき、白石のように、自分の気持ちがひるんでしまいそうになったときに、この努力することのイメージを思い起こしてくれたらと考えます。

そして、こうしたい、こうなりたい、こうしなければと努力をしていこう思い立ったとき、努力をしたからといって、すぐにうまくなったり、できるようになったり、よい結果が出たりなどを期待せずに、とにかく、小さな米粒を一つずつ、休むことなく動かしていこうとする気持ちを大切にしてほしいと考えます。

長く努力を続け、急がず、焦らず、くじけずに、やがてふり返ったとき、努力をしてよかったといえる喜びを味わうことができる子どもたちが増えてくれることを心から願っています。